

空



2009年

SORA 25号

ぼたん雪 (25)

— 1

柴田 佐知子

少しづつ忘るる父に小鳥来る

山国に山がこぞりて十二月

雪女胸の奥処はふぶきをり

鶏のほつつつき歩く冬日和

日向ぼこ父は齡を楽しみて

焼跡を残して帰る消防車

玄海や波ごと雪を吹き上げて

海溝の魚は色失せ冬銀河

津々浦々唄もてめぐり手毬つく

春の雲

高倉和子

伏敵門くぐりてきたる虎落笛

鉄瓶の湯気やはらかき冬至かな

着膨れて人にぶつかること多し

病む母の印少ない古暦

濡縁に色々干して年用意

餅飾る役目を父は譲らざり



畦道のふはふは雪の晴れ間かな

山頂に雲の切れゆく大旦

鷹鳩と化すいくつもの嶺を越え

種を蒔く山影うすきま暮るる

無人駅に花壇のありて春の雲

一輛電車通り過ぎたる麦を踏む

白足袋の母を思へり雛祭

鳥帰る病室の窓いつぱいに

山寺の大きな鐘もあたたかし

最近、会社では団塊の世代の先輩達が次々と停年を迎えている。そのうち、半分近くはそのまま延長して会社に残っている。まだまだ元気だし働けるうちは働きたい、それに会社を辞めてもこれと言つてすることが無いというのをよく耳にする。

退職後の過ごし方に不安を持っている人も多いようだ。確かに毎日が日曜日という生活が楽しいのは最初だけかもしれない。

停年はまだ先だが、私には俳句があるから大丈夫！と思つている。

ボロ市

中田みなみ

小熊手を持ちて一葉記念館

横綱の黒革ジャンパー近づき来

ボロ市やその後知りたき婚衣裳

熊手売福搔き寄せて見せにけり

犬抱きて乗るぶらんこや恵方道

景品の赤き紐解く松囃子



世田谷のボロ市は十二月十五、十六日と一月の十五、十六日に催されるが、普段は眠ったような横町が、当日は身動きならぬ程賑わう。昔は斧、鎌、白等と農産物の交換から始まったそうだが、近年は様変わりしてしまった。私が世田谷の住人になってから五十七年経つが、越し

お降りや宴のごとく城灯り

炉燻りの大黒柱実母散

狛犬に指舐めさせて労へる

地吹雪の切れ間出でんと足浮かし

よその婆よその子もゐる囲炉裡かな

ぽっかりと巨きな温泉壺雪世界

指先で叩いてみたる氷滝

豪雪地奥眼がちにて籠るかな

あの顔の出るトツクリのセーター編む

て来た頃、俎板と雑草取りの小鎌を買った記憶がある。毎年見かけた老人が、見ている前で竹を削り耳掻き売っていたが、もうその姿も消えてしまった。

三軒茶屋駅と下高井戸駅を結ぶ世田谷線は当時床が板張りであった。上田五千石先生に褒めて頂いた「木の床の電車に揺られポロ市へ」は第一句集に載せ、同時作の「ポロ市の時計叩けば動きけり」は東京歳時記に載っている。その頃は立川や厚木からの米軍キャンプのバスが止まり、それこそ青い眼が眼の色変えて骨董を漁っていたものだった。近年は売手が鳴らすオカリナが雑踏を縫い、ヨーロッパ人が手製というガラスのアクセサリーを売っていたり、わざわざ東南アジアのお香を匂わせ小物を売っていたり、昔はあまり見かけなかった光景の一つに和服の古着屋が増えて人だかりしているのが不思議である。掲げられている見事な打掛に足を止めたが、瞬間、幸せに過ぎられたであろうか？という思いが横切ったのであった。

空作品評

柴田佐知子

餅飾る役目を父は譲らざり

高倉 和子

以前、和子さんの父上は立派な門松も注連縄もご自分で作られると聞いたことがある。鏡餅もきちんとして飾られるのだ。家にはもう十分に任せられる後継がおられることは「譲らざり」でわかる。家長の座に端然と座し、日本のしきたりや四季の折り目を大事にすごされる姿が見えてくる。

あの顔の出るトックリのセーター編む 中田みなみ

「あの顔」は勿論知りようもないが、それでも分らないままにあの顔なのだと思えてくるから面白い。みなみさんの作品はいつも新鮮だ。無理な言葉遣いはなく、ごく普通のことを言っているのだが、類句類想を躲してみずみずしい。からりとした明るさもまたみなみさんの持ち味の一つである。

たんぼぼや顔を上ぐれば牛の貌 樋口みのぶ

昔は近所の農家では農耕用の牛や馬が飼われており、犬や猫と同じように身近に見ていたが、近頃は阿蘇の草原などでしか見かけなくなった。これもそのような牧場であろうか。大きくアップされた牛の貌とたんぼぼとの取合せが鮮やかだ。

異国語の御一行様日脚伸ぶ 青山 悠

私の住む福岡にも、海外よりの旅行者が多い。韓国や中国からの団体であると、一見日本人と見分けが付かないことが多いが、賑やかな話し声で国が分かる。「御一行様」の使い方が面白い。「日脚伸ぶ」という季語と相俟つてとぼけた味わいが醸しだされている。

負鶏に涙はあらず真昼なり あさなが捷

雄鶏を闘わせる「闘鶏」は古代ギリシャやローマなど世界で流行し、日本には奈良時代に唐から伝来

したという。平安時代には「鶏合」として三月三日に行う年中行事となった。

〈負鶏は血の匂ひして薄暮かな 木附沢麦青〉：
激しい闘いに嘴まで歪んでしまうことがある。知人は数年前に見たというが、闘鶏はなかなか見る機会がない。

さて掲句、「負鶏に涙はあらず」とは思いがけない切り込み方である。座五の「真昼なり」も切なく一句に流れる情感にうたれた。

表札に年輪のあり初日の出 小林 朱夏

「表札」とかたや「初日の出」。とても太刀打ちできる対象ではない小さな表札なのだが、どうして引けをとってはいない。それはここに「年輪」を見出しているからである。これによって小さな表札が凛とした存在となり、初日の出と響きあつて堂々とした作品となった。

御慶の子体全部を声にして 苑 実耶

「体全部を声にして」との措辞が秀抜だ。元気な子供の姿がいきいき見えてくる。「おめでとうございます」という声も聞こえてきそうだ。

路地に入りたる寒行の声細る 高倉恵美子

それまでは大きな道で朗々と響いていた声なのである。「声細る」によって小さな路地のたたずまいも感じられる。

恵美子さんは骨折により現在入院されているという。好評連載の「耳納だより」は残念ながら今回はお休みである。一日も早いご快復をこころよりお祈りいたします。

青空に一步踏み出す梯子乗 田島 洋子

消防の行事「出初」や、この消防出初式で披露される「梯子乗」は新年の季語。消防の紺の法被姿で直立した梯子に登ってゆく様が的確に表されている。「青空に一步踏み出す」がうまい。洋子さんの句はまことに切れがよい。

肩書はしやばに置いとけ彼岸花 吉村 摂護

やはりこの世は肩書きが巾をきかせるということか。そんなものがなにほどのことかとの反骨の気が満ちて気持がよい。「しやば」という言葉がここでは勢いをもって響いている。人と人との間では「肩書き」などという俗っぽいものは捨て置け。：同感である。

秋深し千年暗き薬師堂 長 憲一

古い薬師堂なのであろう。「千年暗き」という措辞が巧みである。また「秋深し」が薬師堂が経た薄闇の時間へと誘うような効果をあげている。

一本つつ褒めてやりたき草紅葉 白水 良子

紅葉山や銀杏などは大方見上げ、その見事さを称えたりする。しかし足元の小さな草もとりどりに紅

葉しているのである。その健気な姿に、一本ずつ声をかけたくなるというのである。やさしく温かい作品である。

良子さんには今号より挿絵を担当していただく。創刊号より前号まで美しい絵で飾っていただいた樋口みのぶさん、お疲れ様でした。心より感謝いたします。

月光や全て打ち明けたくなりぬ 永原 朱

皓々たる月夜。月光には人を常より遊離させるような力があると思う。「すべて打ち明けたくなりぬ」：月光の仕業なのである。若々しい感受が素直に表現されている。

短日や砂場に富士の残されて 萩 悠子

砂場の景であろう。先ほどまで遊んでいた子供の姿ももう見えない。砂場には子供が作った山があるばかりである。それを「富士」と言い切ったところ

がいい。断定が鮮やかに決まっている。

編みかけのマフラー別の人に編む 青木 朋子

途中でセーターの贈り先が変わってしまっただ。なにがあったのかしらと思わず想像をかき立てられる愉快な作品である。

ひとつ世を十で納むる手毬唄 安武 晨子

巧みな作品である。「ひとつ世を十で納むる」との表現の妙に恐れ入る。句のなめらかな調べも手毬唄にふさわしい。

リフト降りれば雪晴の空の中 岩崎あかり
寒晴に引かれ庚申詣かな 森 紀子

一気に真青な雪晴の世界へ読むものも連れていってもらえたかのような気分になる。まぶしい雪景色もひろがっていることであろう。あかりさんは今号が初投句である。

紀子さんの作品も明るい。庚申詣りぴんと晴れ上がった寒晴に引かれてのことであるという表現が楽しい。

波音の芒月夜となりにけり 織田 高暢

余計なものは全て削り取られ省略が効いている。ここにはただ波音の芒原がひろがるばかり。「芒月夜」とは美しい言葉である。

芋掘りの声静まりて蔓の 山田代貞枝

こちらもまた優れた構成である。上五・中七を受けた押さえの「蔓の山」が秀抜である。

夜店から帰り金魚と暮しだす 岸 千手

季語は夏の「夜店」。夜店ですくった金魚を提げて帰り、ただ飼っているということなのだ。しかし「金魚と暮らし出す」と一風変った表出がなされており驚かされた。表現手腕があればかくもユニーク

空集

柴田佐知子選

潮入の水の迎へし鴨の陣
冬構てふ言葉も知らず育ちけり
柚子風呂に顎の先まであづけけり
真青なる空一枚や初景色
山内に汽笛を届け初列車
福笑ひ笑へぬ顔のできあがる
青空に一步踏み出す梯子乗
襖場に濡れし跡なき初不動

熊本 田島 洋子



進水の巨船押し出す鬼やんま 福岡吉村撰護

肩書はしやばに置いとけ彼岸花

米塚を乗せてはるかな枯野かな

長靴に葱打ちつけて泥落す

餡ぱんの空洞昏き雪催

受け入れぬ救急病棟雪が降る

待針を数へ取り出す冬の夜

水神を閉ぢ込めて滝水りけり

秋天に大筒響とよ動よむ大手門

焼栗も焼銀杏も試食せり

霜降や木の戸木蓋の不老水

鬼の子を押し出す遊び囃しては

福岡中条さゆり